

『何度でも抱きしめて』 第四話

先生が所用で保健室を後にしてから、僕は後片付けをして帰宅した。

家に帰ってからは、ひたすら先生のことを思い浮かべてオナニーを
しまくった。

そのせいで次の日は休むことになる。

土日を含んで月曜日に登校すると、校門で先生を見かけた。

挨拶をすると、先生は穏やかに対応してくれた。

「この間はおめんね。どうしても外せない会議だったの」

「そうだったんですね。それなのに僕が邪魔しちゃったみたいで
……」

申し訳ありませんでしたと謝る前に、先生が顔を寄せて耳打ちして
きた。

（だから今日は、たっぷり相手をしてあげる……この間の埋め合わせ、
してあげるね）

息を殺した低い声に背筋がゾクゾクする。

普段の透き通る声も好きだけど、こういう色気を含んだ声も大好きだ。

美しい後ろ姿を見送りながら、僕はチャイムが鳴る前に教室へと急いだ。

そして昼休みの少し前、僕は保健室に居た。

入口のドアプレートは不在となっているから、ここには誰も入ってこない。

目の前には先生がいる。

いつものように長い脚を優雅に組み変えながら。

「んふふふ、何か私に言いたいことあったんでしょう？ 聞かせて」

「はい、でも……」

「キミが何を言うつもりなのか、私はわかってるけど、それでも聞きたいの♪」

「っ！！」

「その恥ずかしそうな顔、とっても可愛い……好きよ……」

「恥ずかしいです……」

「ふふ、好き……ちゅっ♪」

先生が身を乗り出すと、椅子がギシッと鳴いた。

明るい日差しを受けてほんのり桜色に輝いてる唇が、ゆっくり僕に重なった。

「んちゅっ……次はキミの番よ。私のこと、好き……？」

「はい、す、すきです……」

「ふふふ、よく言えたね……ご褒美、あげる……ちゅ、うううっ♪」

「あああああ……ッ」

短い時間で三度もキスをされて、僕は身震いする。

ほんの少し重なるだけのキスなのに、心は確実に溶かされていく。

「大人のキスの味、たまらないでしょ？ 何かを吸い取られちゃうみたいで気持ちいいよね」

「は、はひiiiiiii！」

「もっと吸い出してあげる……ちゅるるるる……」

四度目のキスは強烈だった。

吸われてる、吸い取られてる……もっと、吸って欲しい。

「キスするたびに、ぴちゅ……キミのきれいな心が、おもてに出てくるんだよ？」

「え……」

「私はそれに味付けをするの……この唇と、甘い口づけで、ゆっくり……ゆっくり……ちゅうっ♪」

そしてまたキスされた。

今度は心に直接、柔らかい口づけをされたみたいに。

「くは……ああ、あっ！」

「ほら、また少し色がついたね……キミは染められるのが大好きだもんね？」

気がつけば僕は先生に抱かれていた。

脱衣はしていないものの、心は丸裸にされていたのだ。

「私の色に、私の意思に染められちゃうんだよ……ほおら、ちゅうう

っ♪」

「うあ、ああ、せん、せえ……！」

「んふふ、ちゆる、ぴちゅ♪　ちゃんと、責任とってあげるからね……」

ひたすら重ねられる甘いキスに、僕はもう降参していた。

顔が熱い。

首から下も熱に浮かされたみたいでおかしくなってる。

「昨日は何をしていたの？」

「ず、ずっと先生のこと、考えて、オナニーして、また好きになって……はう、あああああ！」

「私も、キミのこと、ずっと見てたんだからあ……」

そして先生は僕をベッドに寝かせて、ズボンのベルトに手をかけた。

いつの間にか押し倒されていた状況に気づいた僕は、急激に興奮してしまった。

「おちんちん、もらっちゃうね……太ももの間に、きゅうっ♪」

あっという間にペニスが空気にさらされて、そのまま先生の美脚の間に吸い込まれる。

サラサラした感触の、魅惑の太ももがすでに先走っている僕自身を包み込んだ。

「あっ、きもちいい……でも……うううう！」

「ふふっ、これでオナニーもできなくされちゃったね」

先生の言う通り、これじゃあ自分でさわれない。

「あうっ、ああっ、そんな、これええええ！」

「このまま聞かせてあげる。私があなたに、恋する理由を……ね……♪」

先生は僕を見つめながらゆっくりと足を動かす。

太ももを前後にずらしながら、ゆるゆると僕の魂を削るように。

「キミはね、あの人に似てるの……私が恋した、あの人に」

「！？」

「ふふふ、おちんちん、太ももの内側ですり潰しちゃう……えい

っ！」

ずちゅ、ずちゅっ！　ぱちゅっ、ぱちゅんっ！

「んあっ、きもち、いいい————っ！」

「ぱちゅんっ、て締め付けられて嬉しい？　もっと喜ばせてあげる……」

巧みなスマタのせいで、僕の体がビクビク震えだす。

それでも速度を変えずにゆっくりと先生は僕を責め続けた。

「私の好きだったセンパイはね、キミみたいに可愛い顔で」

「はぁ、はぁんっ！」

「素直で、優しくて、いつも一緒にいたかったんだぁ」

我慢汁が滴るペニスを挟み込んだ先生の太ももは、男の思考を蕩けさせる凶器だった。

もう何も考えられない。早く出したい、この太ももにドピュドピュしたい！

「うふ、おちんちん、震えてる……じゃあ、ぱちゅんっ♪」

「ひぎいっ！」

「だらしないお顔も、大好きよ……ちゅ♪」

美脚の動きは緩慢なままで、キスではぐらかされる。

それがたまらなく屈辱的で、甘美で、刺激的だった。

「じゃ、じゃあ先生は……僕を見て、あ、あああああ！」

「キミをこの学園で見た時、ドキドキしたんだよ？　いつかエッチしたいな、って」

甘ったるい声でささやく先生にますます興奮してしまう。

鼻先で感じる吐息も、少しだけ頬をくすぐる綺麗な髪も、全てが魅力的で——、

「でも先生と生徒じゃ無理だよなって諦めていたんだけど……キミの方から来ちゃった♪」

「ば、僕が……あ、あっ、あっ、ああああ！」

ぐちゅり、と下の方で音がした。

同時に脊髄を甘い痺れが駆け抜けた。

「ふとももをきゅんっ♪ んふ、油断してた？ 休ませないよお……」

「あ、ああああ！」

「こんなに、おちんちんを膨らませて……これはもう、犯すしか無いでしょ？」

「お、犯す……って！」

「キミのこと、逃したくないもん……何度も何度も何度も、おちんちんを溶かして、体の芯に快感を刻みつけて」

美脚の戒めが緩む。

だが同時に、ペニスの先端が何かに包まれた。

湿っぽくてヌルヌルしているなにかに、僕は閉じ込められた。

まさかこれは……！

「私の奴隷（おもちゃ）にしてあげたいなって、ずっと考えていたの」

「ひああああっ！」

「私のおもちゃにされて、うれしい？」

全身を包み込まれたみたいに甘い感覚に身悶えする。

声も出せないほど気持ちよくされてしまった。

「ふふふふ、下むいてる……でも私、おもちゃは大切にするよ……今より、もっと」

「うあ、ああああ……」

「もっとキミは、私に気持ちよくされちゃうんだよ……」

おもちゃにされるのはきもちいい……きもちいいよ……」

先生の指先が僕の顎をくいと持ち上げる。

視線が合う。

好きだ、先生……見つめられてるだけで、溶けちゃう……。

「僕、先生の、おもちゃにされ、きもちいい……」

「ふふ、きもちいいの？ ほら、もう一度いってみて？」

「きもちいい……きもちいいです……」

「うん、そうよ……もう一度……キミは私のおもちゃ。

エッチで情けなくて、でも私のことが大好きな、可愛いおもちゃなの」

言葉が心に染み込む。抗えない。

「ぼくはおもちゃ、先生の……」

「ずっとそばにいていいんだよ？」

朝も、昼も、夜も……キミのそばに居てあげる」

ぎゅっ♪

「あ、あああああ—————っ！！」

「ずっとあいしてあげる……ずっと、犯し続けてあげる♪」

抱かれながらの囁きに、また僕は壊されてしまう気がした。

「先生、も、もう僕……！」

「このまま搾り取ってあげる。

ゆっくりじわじわと……ぎゅうううう~~~~~！」

生ぬるい沼みたいな感触が変化した。

閉じ込められていたペニスが解放された瞬間、また太ももの間に封じ込まれる。

ビクビクビクンッ！

「ふともものうちがわで、イカされちゃうね？　ぎゅううう~~~~
~~！」

「あがああああああっ！！　こんなの、気持ちよすぎてええええ
え！！」

「んふふ、これでおわり……ぎゅううううううううううう~~~~
~！！」

びくっ、びくっ！

「クスッ……イっちゃえ♪」

「あ、あああああ。先生、イクっ！　イきますうううう！！」

ドピュウウウウウウウウウウウ~~~~~
ッ！！！！

なめらかな感触に酔わされ、弾力性に富んだ太ももに搾り取られる。

抱きしめられたまま僕は大量に射精した。

切れ目なく、何度も何度も精を吐き出し、先生の腕の中で打ち震え

る。

「くすっ、今日も負けちゃったね」

「うあ、あ、せん、せええ……」

「この先も、いっぱい負けさせてあげる。エッチな欲望で、綺麗な心を黒く塗り替えてあげる……」

そしてまた始まる責め苦に僕は歓喜する。

先生の細くてしなやかな太ももに挟まれたまま、さらに四回も搾り取られてしまった。

(つづく)